ペンテコステ講筵

聖霊降臨の現実

2003年6月15日（東京 新宿）

イエスはしばしば彼らに現れて

今日はペンテコステ集会です。ペンテコステといえば、いつも使徒行伝が読まれる。私は使徒行伝はもちろん読みますけれども、それを福音書の中からしっかり受けとっていきたいと思っている。とりあえずは、使徒行伝1章、2章のところのペンテコステに関わるところを先ず見てから、福音書の方に移りたいと思います。先ず、使徒行伝1章では3節に、

「3**イエスは苦難（くるしみ）をうけしのち、**

即ち十字架のこと、

多くの慥（たしか）なる証（あかし）をもて、己の活きたることを使徒たちに示し、四十日の間、

しばしば彼らに現れて、神の国のことを語り、

「しばしば彼らに現れて」というが、福音書の中ではそんなに出てきません。ヨハネ伝では、

「これが三度目である」

という三回分しか出てませんし、その他の福音書でもそんなにしばしば出てませんけれども、ここでは「しばしば」とあります。

私は察するに、イエス・キリストがあの栄光の御姿をもって現れてくださるというのは、例えば大統領がやって来て成田空港に降り立ったとか、テレビで写真を映すような万人に明らかという、そんな現れ方ではない。それは「肉なる人」の現れ方はそうですよ。肉なる人は東京におれば大阪にはありませんし、大阪の人は東京へ来れば大阪は空っぽだというふうに、誰が見てもそれは見えるわけです。

栄光の主キリストはそういう現れ方をなさらない。エマオの途上で弟子たちに現れているかとおもうと、パッと今度はエルサレムに現れたり、どこに現れるか本当に自由自在なんです。これが「霊なるキリスト」の神髄です。肉体をとっておられた時は、いくら思われても、ご自分が二つも三つも分かれることはできなかった。つまり肉体の制約を受けておられた。

それが今度は、あの栄光のお姿に変わられてからは、肉体的な相対的な次元の制約は全部取り払われていますから、必要に応じていつでも現れてこられる。しかも必要な人に現れてくださる。必要に応じて必要な人に現れてこられるから、それで「主イエスに出会った」という人を集めてみると、「しばしば現れて」という記事になる。

それは客観的証拠は何もありませんから、「復活はウソだ」とか人は言うわけです、何の

証拠もないから。この世的な証拠を探す方が間違っている。この世的な相対次元の証拠を集めようと思ったら、肉体限りのことにしてもらわないと。高次の次元に入られたお方がその御姿をもって現れられる時は、本当に特に恵まれた人、選ばれた人、必要な人、そういう人に現れてくださる。そして必要が終ればサッと姿をお隠しになる。そういうお方です。

主さまは一端、「天に昇られた」とあります。姿が見えなくなった。弟子たちが見送っていたら、天に昇って行かれた。天使が現れて、

「ポカンと口を開けて見ているのではないよ。同じお姿でまた降りてこられる」

と、そういうことが使徒行伝に出てきます。それから、昇って行かれる前にイエスは、

「あなた方は祈って待っていなさい。聖霊を受けるから。聖霊を受けたら、あなた方は別人の如くなる」

ということを仰います。

4また彼等とともに集りいて命じたもう『エルサレムを離れずして、我より聞きし父の約束を待て。5ヨハネは水にてバプテスマを施ししが、汝らは日ならずして聖霊にてバプテスマを施されん』

これは、

「この火、既に燃えたらんには、我何をか望まん。されど我には受くべきバプテスマあり。」

と。十字架、血のバプテスマを経なければ、どうしても聖霊を弟子たちに与えることができない。それを美事に果たされたわけですから、天に昇られる。昇られるにあたって、

「あなた方は祈って待っておれ。そしたら、日ならずして聖霊でバプテスマされる。聖霊を本当に受けるから」

と言い残して天に昇って行かれる。

……8然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力(ちから)をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極(はて)にまで我が証人とならん』

と。弟子たちは、

「イスラエルの国を回復なさるのはいつですか?」

とか、くだらないことを聞きます。もうここで既に弟子たちの思いとキリストの思いとがどれほどかけ離れているか。主さまの御思いは本当に父、神さま、それだけなんです。そして、神さまのお示しがなければ、何もなさらない、何も約束なさらない。だから、キリストが一つ一つ仰ってくださることは全部、父なる神さまのお約束、裏づけがあって、そして語っておられる。そうでないことは語っておられない。そういう必ず実現する、成就するという事柄を我々に語ってくださっています。そして、天に属することですから、「イスラエルの国をいつ復興するか」とか、そんなことではなかった。

「あなたたちにとって神さまとの関係において大事なことは、聖霊を受けるこ

とです。このお方がおいでになれば、あとはそのお方があなた方に必要なことは全部お示しになる」

と。地上におられたキリストは直接、父なる神からそれを受けておられましたから、ことごとくが父なる神の御業でした。イエスを通してなされる父の御業でした。今度は、イエスさまの御姿が見えなくなるわけですから、弟子たちにそして私たちにも、弟子たちの端くれとして弟子たちの群れに加えてもらった一人として、

「ことごとくこの聖霊が今度は、あなた方にすべきこと、語るべきことを、すべてお教えになる。だから、それに私はゆだねる」

と、こう仰っているわけです。

「4……『エルサレムを離れずして、我より聞きし父の約束を待て。……8然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん、……地の極にまで我が証人とならん』

全世界にあなた方は証人となって証して行くんだよと。そこで、天に昇って行かれた。彼らは、あと祈っていました。

14この人々はみな女たち及びイエスの母マリヤ、イエスの兄弟たちと共に、心を一つにして只管いのりを務めいたり。」（使徒行伝1・1〜14）

今まではしばしば現れられたけれども、これからは現れない。これからは御姿は見ない。

「聖霊が今度は臨み給う。そのときを待て」

と。そう言われたら、これは祈らざるを得ませんね。約束の聖霊を受けるまでは祈らざるを得ません。だから、弟子たちは十日間祈っていたということです。

五旬節の霊風・霊火

そして、第2章に行きます。

「1五旬節の日となり、彼らみな一処に集い居りしに、2烈しき風の吹ききたるごとき響、にわかに天より起りて、その坐する所の家に満ち、3また火の如きもの舌のように現れ、分れて各人の上にとどまる。

霊風、霊火ということ。一人ひとりの上にその火が止まって――もちろん、火事にはなりませんよ――モーセの時もそうですね、柴の木が燃えている。燃えているから見ようと思って行ったら、ちっとも木は燃え尽きない、木は焼けない。しかし火は燃えている。そういう異象をモーセは非常に興味本位に見ていましたら、厳かな声が響いてきて、

「靴を脱げ、ここは聖なる場所である」

と言われて、モーセは平伏します。そういう、モーセにおいて徴として現れた火です。

今度は、聖霊という本当に生命の火が一人ひとりの上に止まった。それまでは、外側からイエスさまを見てました。かつては弟子として一緒に生活をした。本当に外側から見ていま

したが、内側のイエスさまは見えない。今度は復活されたキリストが出てこられたら、これは前のイエスさまとは次元が違う。

「ここにも傷の痕があるんだよ」

と言って、お見せになる。また、お魚を食べられた。そのお魚はどこに消えてしまうのかなと私は思うけれども。お魚までも霊化してしまう。とにかく、前の肉体のイエスさまとは明らかに違うお方が目の前にいらっしゃる。それがしばしば現れられたという。

今度はそれとも違う。そのお方も見えなくなる。本当に内側に来られる。外から見るのではない。外に見るのではない。内に主がお宿りくださった。これがペンテコステなんです。これは本当に画期的なことですよ。今までは肉のイエスさまを見ました。今度は霊のイエスさまを見ました。

「内にイエスが宿ってくださいました。そこで私は主さまと一つになりました」

と、これがペンテコステなんです。このような形で、周りの人たちがびっくりするような形で、その現象は本当に火が降ってきたという現象として、人々に明らかになった。彼らは「異言」を語りだした。物凄く讃美しているわけです。ある人は、

「彼らは甘酒に酔っているんだ」

と言う人もいたと書いてある。けれども、語っている言葉はそれぞれ違う方言を語っていて、あちらこちらから、あるいはギリシヤからやって来た人たちがみな母国語を聞いている。こ

の百何十人かが一斉に祈っているから、騒がしいのなんの、それは大変騒がしいでしょうね。しかし、その騒がしい言葉の一つ一つが周りにいる人たちにわかるわけです。

「あっ、これはギリシヤ語で神を讃えている。これはアラミ語で神を讃えている」

というふうにしてわかるわけです。それでペテロが立ちあがって弁明を致します。それが2章14節です。

「14ここにペテロ十一の使徒とともに立ち、声を揚げ宣べて言う『ユダヤの人々
および凡てエルサレムに住める者よ、汝等わが言に耳を傾けて、この事を知れ。
15今は朝の九時なれば、汝らの思うごとく彼らは酔いたるに非ず、16これは預
言者ヨエルによりて言われたる所なり。17「神いい給わく、末の世に至りて、
我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子女は預言し、汝らの若者は幻影を見、
なんじらの老人は夢を見るべし。18その世に至りて、わが僕・婢女にわが霊を
注がん、彼らは預言すべし。19われ上は天に不思議を、下は地に徴をあらわさん、
即ち血と火と煙の気とあるべし。20主の大なる顕著しき日のきたる前に、日は
闇に月は血に変らん。21すべて主の御名を呼び頼む者は救われん」（使徒行伝2・14〜21）

「主の御名を呼び頼む者」、その者に主は臨み給う、内に宿り給う。中に入ってくださる。これが終りの時に、末の世に臨むぞという。それが主イエスの十字架の成就によって全うさ

れるわけです。

十字架、あの血のバプテスマ、罪の贖い、我々の全き贖いというものが成し遂げられるまでは、この聖なる神さまの霊は我々の中に降れないんです。降りたくても降れない。ところが、主さまが備えを全部してくださった。ヨハネ伝14章では、

「所を備えに天に昇る。天に所を備えたら、またあなた方の所に帰ってくる」

と、そういう言い方をしておられますけれども、実に私たちの中に主さまが所を備えてくださった。私たちの中に所を備え、その御業を終えて天に昇って、約束の聖霊を降してくださる。天に所を備えに行かれたはずなのが、私の中に場所をつくってくださった。

「贖いということによって、もうあなたはすっかりきれいになっている。用意ができ上がっている。だから、祈っていたら、降ってくる」

と。歴史的にはあのようにして一つ一つ時を追って成就しました。十日間の祈り、そして集団で祈っていた時に本当に目に見える形で火が降ってきました。これは本当に我々人類に対するシンボル（象徴）ですね。この突破口が開かれたことによって、私たちは

「主さま！」

と御名を呼べば、直ちに来てくださる。もう十日間は要らないんですよ。「主さま！」と本気で御名を呼べば、本当に十字架を受けとれば、即、聖霊は臨んでくださる。それが実現した記念日がこのペンテコステです。

だから、こういったペンテコステは、質的に私たちは、来る日も来る日も毎日毎日が、私たちの毎日毎日の祈りが実はペンテコステなんです。「主さま！」と呼ぶ時に来てくださる。毎日毎日がペンテコステです。我々は主さまの霊によらなければ実質的に新しくはなれません。十字架は片づけてくださった。けれども、

「十字架が片づけてくださった」

ということをいくら命題として覚えても、それは聖霊が宿って、「そうだよ！」と言ってくださらなければ、本ものにならない。主さまが内に宿って、「そうだよ」と言われて初めて、

「ああ、十字架というのは本当にありがたい。十字架の有り難さがわかりました。ああ、主さま、本当に私のために罪を背負ってくださった。私のために天に所を備えていてくださるんですね。あの「山上の垂訓」といわれるところで語っておられることは全部、本当だった。あれは本ものですよ！」

と。そういうことを全部、内側から

「然り、アーメン！」

と言わせるのが聖霊なんです。時間的順序からいうと、福音書があって、次に使徒行伝があって、と来ますけれども、我々からすると、ペンテコステから全部こう見るんです。

この聖書も結局そうなんです。聖霊がすべてを明らかにし給う。聖霊をいただいて、それから本当に聖書を読めるようになる。それまでは仮のものです。でも、仮のものがなかった

ら、我々は聖霊を受けることはできません。仮のものとしてしっかり勉強して、しっかり受けとってやっていると、今度は本ものにそれが切り替わる。仮のものが仮でなくなるわけです。仮のものだからといって、その勉強をしなかったら、本ものになりません。

例えば、小池先生は1950年に物凄い体験をなさった。けれども、あそこから過去のものを振り返ってみた時にみんな生きているんですよ、それまでの歩みが。非常に緻密な歩みです、聖書の勉強もすべて。それが全部、今度は聖霊によって活かされて、光を放ち出した。ですから、それまでの歩みは決して無駄ではない。先生は先生なりに苦しまれて、そしてそのあとに聖霊があのような形で出てきた。先生は私たちにとっては、ペンテコステを実際体験して、この使徒行伝の世界を我々の中に引きずり込まれた方です。先生においてあれが起こりましたならば、私たちはそのあとスッと行けるわけです。

「私たちを見なさい」

この使徒行伝の世界ではこういう烈しいペンテコステがあって、あとはもう弟子たちを通して自在に御業が現れています。そして、弟子たちが按手すれば、もう直ちに聖霊が降るということが各地において異邦人の中に起きたり、いろんな所で起きてます。

このペンテコステのあとで、弟子たちがやった一番目の出来事が第3章でしょ。生まれながらの40歳ばかりの足の萎えた方――これは誰のせいでもありません、とにかく生まれなが

らに歩けないんですから――その人はずっとどうして生きていたかというと、美しの門の所に担がれてきて、そこに置かれて、お宮参りの人たちに施しを乞うて、それで生活していた。そして、ペテロとヨハネが通りかかる時に、

「1昼の三時、いのりの時に、ペテロとヨハネと宮に上りしが、2ここに生れながらの跛者かかれて来る。宮に入る人より施済を乞うために、日々宮の美麗という門に置かるるなり。

この午後3時の祈りに合わせて、そこへ担がれてくるわけです。そして通りがかりの人から施しを受ける。

3ペテロとヨハネとの宮に入らんとするを見て施済を乞いたれば、4ペテロ、ヨハネと共に目を注めて『我らを見よ』と言う。5かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、

ペテロとヨハネがこういう行動に及んだのには、何か迫りがあったからだと思う。ペテロとヨハネの中にこんな力が漲っているということをそんなに――確かに聖霊のバプテスマはありましたけれども、自分の肉体的感覚で力に満ちているとか――そんなことを果して感じていたのか、それは私にはわかりません。けれども、何かペテロとヨハネに迫りがあったのだと思う、「この人だよ、この人だよ！」と。そこでその施しを乞う人と目が合う。じっと見つめて、「この人だよ」という神さまの迫りがあった。そして、

「私たちを見なさい」

と言った。

「はい、何かいただけるんでしょうか？」

と、きっと穴のあくほど見つめたんでしょう。そうしたら、

「私に金銀はないよ。でも、もっと凄いものを上げるから。イエス・キリストの名によって歩め！」

と、手を引っ張ったら、たちどころに全身に力が漲って、生まれて初めて立ったという、大変なことが起こりました。これがいかに大変なことだったかということは、このことによってペテロとヨハネは引っ捕らえられて、宗教裁判を受けていますから。我々はちょっとも宗教裁判をまだ受けてませんけれども、宗教裁判を受けているんです。

「これは大変なことだ。こんなのを生かしておいたら、ユダヤ教はつぶれてしまう。早く、小さな火のうちに消してしまえ、芽をつみとれ！」

ということがここで起こっているわけです。

6ペテロ言う『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』7すなわち右の手を執りて起ししに、足の甲と踝骨とたちどころに強くなりて、

そしたらもう、その癒された人はうれしいでしょうよ。

8躍り立ち歩み出して、且あゆみ且おどり、神を讃美しつつ彼らと共に宮に入れり。

今度はペテロと一緒に祈るためにお宮に入って行った。

9民みな其の歩み、また神を讃美するを見て、10彼が前に乞食にて宮の美麗門に坐しいたるを知れば、この起りし事に就きて驚駭と奇異とに充ちたり。

11かくて彼がペテロとヨハネとに取りすがり居るほどに、

それはもう、このペテロとヨハネから離れたら大変だ、これは恩人だと思って、しがみついているわけですね。

民みな甚だしく驚きてソロモンの廊と称うる廊に馳せつどう。12ペテロこれを見て民に答う『イスラエルの人々よ、何ぞ此の事を怪しむか、何ぞ我らが己の能力と敬虔とによりて此の人を歩ませしごとく、我らを見つむるか。

「己が能力と敬虔」とは「己が信仰」ということ。自分の信仰ではないと。

「ペテロ何者ぞ、ヨハネ何者ぞ、自分らの中には何も無い。金銀もなし、力も何も、わが力はない。ただイエス・キリストという方が私の中に宿っておられる。その方から力が流れてくる。その方が、「癒えよ！」と仰ったら癒えるんだ。その方が「立て！」と仰ったら立てるんだ」

と。「立て！」という御言には力がこもっていますから、そして力が働いたら立ってしまう

わけです。このペテロにとりすがった人は確かにペテロを信じたでしょう。

「この人は何かちがう。この人は何かしてくださる」

と信じたでしょう。そこで働いたわけです。始めっからそっぽ向いている人には聖なる霊は働きません。やはり、「何かしていただける」という期待をこめてじっと見ている人に対してバーッと働く。そういうものなんですね。

聖霊のバプテスマ

だから、正しく向くということが大事です。我々は主さまに、十字架の主さまに向くことです。贖(あがな)い給うた主さま、そのお方があの栄光の霊体をもってスッと現れてきて、迫ってきてくださっている。そういうふうにいただくわけです。

「主さま、本当にあなたの御贖(あがな)いによって私は無者にされました。ありがとうございます。いよいよ私の中に迫り宿ってください。あの聖霊のバプテスマがペンテコステで起こりました。あんな現象でなくて結構です。ただ内住してください。本当にあなたが私の中に宿って、あのペテロやヨハネのような姿にしてください。そして、どこへでもお遣(つか)わしください。あなたのお望みのままに私を用いてください。私はあなたに自分を捧げています」

と。そういう思いで、日毎に主さまに祈るんです。

「イエス・キリストの御名(みな)によってバプテスマを受けよ」

と、ペテロは勧めるけれども、何も水のバプテスマではない。イエス・キリストという御名——御名は実体です——イエス・キリストという霊的ご人格が迫ってきてくださる、その中に身を沈めることです。

「身を投げ入れろ。身を浸(ひた)せ、とっぷりその方に包まれろ。イエス・キリストという御名、その御名の中に自分がぶち込まれてしまえ」

と小池先生は言われる。

「バプテスマ」というのは「バプタイズ」(baptize)「水に浸す」ということです。すっかり水に浸して、もう水の上には何もありません。全部水に被われて、水漬(づ)け、聖霊漬けです、我々は。御名の中に御名漬けになりますと、そうしたら聖霊に貫かれる。水のバプテスマから上ってくる時は別人となっているということを表している。水のバプテスマというのは、旧き己というものが葬られたというシンボルなんです。水から上ってくると、これは別人となって甦ってきた。新しい人間として生まれ変わってきた。それを表している。

私たちはイエス・キリストという、その迫り来たり給う愛なるお方にとっぷり浸(つ)かります。温泉につかりますように、全身がこのイエス・キリストという霊なるお方の中にジワーッとつかりますと、そしたら今度は、そのお方がうちに内住してくださる。

「あなたは新しくなった。あなたは新しく生まれたよ」

という。

「**人新たにうまれずば〔神の国を見ることができない〕、人は上から生まれなければ、霊から生まれなければ〔神の国に入ることができない〕。肉から生まれるものは肉のままだ。これではだめだ。人は上から、霊から生まれなければ**」（ヨハネ3・3〜6）

とありましたね。

「**ではいったい、霊から生まれるとはどういうことですか？**」

とニコデモは非常にあわてましたけれども。キリストは、

「**これは風が吹いているようなものだ。風がどこからくるのか誰も知らない。霊から生まれるというのはそうだ。私は霊なる風だ。私は霊風だ。霊なる火だ。それに浴すると、あなたは新しく生まれているよ**」

と言われる。ここのペテロとヨハネに癒された人も、そんなことは予期もしていなかった。予期もしていなかったけれども、ペテロと正面で向き合った時に、ジッと目を見た時にスッと来た。そして力がきたわけです、ペテロの言葉と共に。主さまは、

「**あなたたちに聖霊を与えることが私のたっての願いだ。私はそのために地上に来た。何で天を離れて地に来たか。あなたたちを本当に神の子にするためだ。本当の神の子にするために、そして、福音が語られるため、御言が語られるた**

めに。幸いだよ、霊の貧しい者は。幸いだよ、悲しんでいる者は。幸いだよ、心の清き者は……」

と、語られたけれども、人間はありがたく聞いても、それが自分のものにならない。妨げているものがある。憧れてはいても、それが自分のものにならない。素晴らしいものを見れば見るほど、こちらには嘆きだけが残るわけです。何たる隔たりか。これを「月とスッポン」と申します（笑）。「天と地」というふうにまるで違う。そういう嘆きしかない。

そういう嘆きを喜びに、死を生命に変えてくださる。その御業には血のバプテスマが、ゲッセマネの祈りが必要だった。ただ御言を語り、御業をなし、按手をしてということでは――病気は瞬間的に癒されますよ、しばらくは癒されますが、でもまたぶり返します。ラザロはあんなふうに甦らされたってやっぱりラザロは死にます、また病にもかかります――本当に質的に新しい次元に入るということはできないわけです。キリストがなさったことはみな徴でしかありませんでした。これは本当にそのことが成就する時がくる。

「十字架の血のバプテスマを通って、聖霊となってあなたたちの中に宿るならば、そしたらもう、たとえ肉体は滅びても、あなたは死んでも死なない生命をもらっている。私は生命のパンである。生命のパンはモーセがあたえたようなパンではない。モーセは肉体を養うパンを確かに与えただろう。けれども、私というパンは霊を与える、生命の霊を与える。肉体は朽ちても、朽ちない本当の生命を与える。これは

私が世に与えるものである。そのために私はやって来た。そのために私は血のバプテスマを受けなければならない。それが成し遂げられるまでは、思い迫ることいかばかりであるか。」

と仰っています。それを美事に果してくださった。

イエスさまは「ノー」ということはいつでも言えたんですよ、ご自分には何のいわれもないんですもの。十字架を背負わなければならないという、その原因はご自分の中に何もない。そうでしょ。我々の中には確実にあります。我々は全部、十字架にかかって当たり前のような生活をしたわけですから、神さまに対する関係では。まぁ十字架ほどひどくなくても、とにかく天国へは行けない。陰府（よみ）が我々の帰属先である。死というものが帰属先である。土に還るということが我々の定めであって、霊が甦り、あるいは霊体をいただいて、神さまの御国に迎えられる、そんな種は私たちの中には一つもありません。これをまずやっぱり本当に知ってないとダメですね。「当然、私は向こうへ行ける」なんて、大きな面（つら）をしてたら、これはダメです。それはその死に定められた、陰府に定められた、その因縁因果（いんねん）、種、罪を十字架で片づけてくださったから、それはすっ飛んでしまってもうないんです。

「死に行くべき種はもうありません、審かれる種はありません、全部きれいになくなっています」

ということ。あの「ベンハー」の映画にありましたね、彼の癩病の母と妹がサーッと潔めら

れたでしょ。もう見ても全然、病の痕かたもない。全く新しくされたという場面が「ベンハー」の最後に出てくる。

〔註：映画「ベンハー」(Ben-Hur) は、1959年のアメリカ合衆国の叙事詩的映画。日本初公開は1960年。帝政ローマの時代に国を失ったユダヤに生まれた青年ベン・ハーが苛酷な運命に巻き込まれ、ある時は復讐に燃え、ある時は絶望に陥りながらも、神が為す業により再生される迄の軌跡と、その遍歴において姿を顕して道を照す救世主イエス・キリストを絡めて描く。キリストの生誕、受難、復活が物語の大きな背景となっている。…イエスの最期を見届けた彼の心から復讐の炎は消えていた。あの雷雨の中で郊外の洞穴に退避した母と妹は急な激痛の後に病が癒えて、元の健康な姿に戻っていた。彼は二人を抱きしめながら喜びを分かち合い、神の奇跡を知る。（ウィキペディアより）〕

それと一緒で、私たちは十字架の主さまを本当にいただいて、

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

と、それが告白となって出てくる時は、もうマイナスの種はどこを捜してもない。そして、光がスーッと入ってくる、生命が流れてくる。そういう所に我々は入れられてしまっている。これは全部、神の御業なんです。神の御業であって、人の業（わざ）ではありません。だから、人は何一つ誇ることはできない。

「私は十年間、キリストに仕えてきたから、聖霊をいただいた」なんて。それは十年仕え

たかもしれないけれども、それが原因で聖霊がくるのではない。それとは全く無縁です。主さまが一方的にそれを下さる。どんな人にも下さる。十年仕えたということは、その後の働きのために役に立ちます。その後の働きをする時に、自分が歩んできたひたむきな歩みというのは必ずプラスになりますけれども、それだから下さったわけではありません。

霊なる人としてのトレーニング

だから、今まで何もしないで突然、聖霊を受けた人はとまどいがありますよ。

「クリスチャンライフというのはどういうことなのだろうか？」

と、一つ一つそこからまた教えてもらって、歩み出さなければなりません。聖霊を受けた途端に天国人になって、向こうへ行くわけではありませんから、やっぱりトレーニングを経ないと。霊なる人としてのトレーニングがそれから始まります。

なぜかというと、私たちは肉なる人でありますから、神さまの目から見たときに、私たちはもう死に定められる、罪に定められる因縁因果で――それは全部洗い流されていますけれども――肉体を宿としている限りは、そこに必ず戦いがあり、衝突があります。霊なる思いと肉なる思いが絶えずぶつかり合います。

聖霊を受けた人というのは、霊なる働きが強い。絶えず目を天へ向けさせるんです、この聖霊というお方が。聖霊の本国は天国ですから。我々の生まれながらの本国は地獄、土です

から、絶えず向こうを思う。でもやっぱり、永遠を思う心も授けてくださったんです。我々の思いはこうだったけれども、こっち（地）の方が強くて、向こう（天）に対する憧れはかすかだったのが、今度は逆転して、向こう（天）に対する思いが強くて、こっち（地）に対する思いは光を失っているというか、無力化されている。私はそうだと思う。本当に向こうとの結び付きの思いが強くなって、この地上のものは光を失っている。誘惑しないんですね。

「世の宝がどうしたの？」

と、それまでの自分だったら言えない。

「宝、それはいいですね」

と、きっとそうなると思う。

「世の宝、それがどうしたの？　この世の栄光、それがどうしたの？　この世の地位、それがどうしたの？」

と。「キリストには代えられません」という聖歌がありますね。それは聖霊があのように歌わせるんです。

〔註：聖歌521「キリストには代えられません」

1キリストには代えられません。世の宝もまた富も。このおかたが私に代って死んだゆえです。

（おりかえし）世の楽しみよ去れ、世の誉れよ行け、キリストには代えられません、世のなにものも。

2キリストには代えられません。有名な人になることも。人のほめる言葉もこの心をひきません。

3キリストには代えられません。いかに美しいものも。このおかたで心の満たされてある今は。」

小池先生は、

「聖霊の他に何もない。聖霊に代えられるものは何もない」

と言われた。でも、小池先生というのは、「肉なる人」としてはいろいろ憧れ(あこがれ)を持っておられたと思います、いろんなことに対して。負けず嫌いだから、何でもできないと悔しがられる先生だろうし、地位だって名誉だってみんな欲しかった方だと思うんです、肉なる先生としては。でも、聖霊を受けてしまわれてからは、

「そんなものは、それが何だよ」

ということになったと思う。私はそうとしか思えない。東大一高を憧れてあれだけ言っておられるのは、やっぱりそういう、私らからみたら「肉」ですよ、それは(笑)。やっぱりこの世的なものがあったと思うんです、あの名門小池家でありますから。ところが、聖霊を受けてからは、

「聖霊に代わるものは何もない」

と言われた。時々、チョロッ、チョロッと「肉なる人」がもたげますけれども。だから、

「人間小池を見るな」

と仰ったのではありませんか。そんなものが百%なくなったら、「人間小池を見るな」なんて言わないで、「人間小池はもういない。聖霊の小池だけがいるよ」と仰れるはずだけれども、

やっぱり人間小池が残りましたものね。だから、

「そんなものは見ないでくれよ」

と先生は仰ったわけですから。「はい、見ません。小池のバカヤローなんかは見ませんよ」と言って、言い返したらいいんですよ(笑)。

天国がわが本国

そういうことで、聖霊を受けるということは、本当に天国がわが本国であり、

「わが国籍は天にあり」

と。そこにキリストがいらっしゃる。やがて時が来れば、キリストが現れて来られる。

「その時、我々は主と同じ御姿(みすがた)に化せられる」

という、あのピリピ書にそう書いてます。ピリピ書3章、それからコロサイ書、そういったパウロの晩年の書簡ではそのようにして、本当にキリストが天から間近に物凄く来てくださる。その時、我々は同じ御姿に化せられる。

「我が国籍は天にあり」

と。ところが、現実に周りを見渡せば、この「地」に属する人たちがたくさんいて、地の思いに囚われている。彼らの思いは地のものだということをピリピ書では、

「19彼らの終(おわり)は滅亡(ほろび)なり。おのが腹を神となし、己が恥を光栄となし、ただ地

の事のみを念う。

と、こういう言葉で表しています。そういう人たちがキリストの十字架に敵対して歩んでいる。キリストの十字架に敵対して歩む者はどういう内面かというと、

「おのが腹を神となし、己が恥を

己自身を神となし、己が恥を、神さまから見たら恥と思えるものを、

自分の光栄となして威張っている。そして、ただ地のことのみを思う」

という。

20されど我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの救主として其の処より来りたもうを待つ。21彼は万物を己に服わせ得る能力によりて、我らの卑しき状の体を化えて、己が栄光の体に象らせ給わん。」（ピリピ3・19～21）

と。だから、「この肉体のままで栄光の姿に変えられる」と、そこまでパウロは思っているんですよ。

「既にこの世を去った人、眠った人、その人はラッパが鳴り響いたら瞬間に栄光の体に化せられる。生きている我らはこのままで栄光の姿に化せられる」

と。「もう今にも来られる」と、そう思っていた。しかし、そういう

「その迫る思いというものを質的には我々も同じように持ち続けようではないか」

というふうに小池先生は呼びかけている。だから、「終末的実存者」「終末的天国人」という、

「終末」ということをあれだけ先生は強調しておられるのは、そういうパウロにおけるような御国の迫り、キリストの迫りを感じていたわけです。キリストも、

「私が再び現れる時まで、あなた方の中に死なない者がいるよ」

ということを仰ったです、あの山上で変貌された時に。そのぐらいキリストも御国の迫りを感じておられた。そして、パウロも感じていた。年月は二千年経ちましたけれども、

「質的にはその迫りはいよいよ強く迫ってきていることをしっかり受けとれよ」

というのが先生の我々に対する語りかけなんですよ、あの『無の神学』を始めすべての所で言っていることは。そして、「ペテロの手紙」の中で、

「神さまがその時を延ばしておられるのは、一人でも多くの人に救われて欲しいということで、時を延ばしておられる。神さまにとっては、一日は千年の如く、また千年は一日のようだ」

と、そういうふうにペテロは言ってます。ペテロの時までまだそんなに経ってないのに、ペテロはそういう言い方をしてます。それからまた延びているわけですけれども。

私どもは「肉なる人」としてはこの地に属します。だからこの地の法則を受け入れなければなりません。御飯の準備もしなければいけません。身体も大事にしなければいけません。肉なる人としては、この肉の法則に従って体を大事にするということは大事です。

けれども、「霊なる人」としては、それに勝って本当に主さまとの繋がり、結びを太く太

くして、霊なる人が肉なる人をコントロールしていくような生き方をしていく。そして、今まで地の宝と思った物には見向きもしませんと。それから、いわゆるこの「世」の放縦とか、情欲とか、そういったさまざまな世の人たちが当然と思うこと、我々はもうそういうものとは縁を切っています。

ただ、私たちは肉体にあるものとして、肉体の法則に従って、身体を大切にしていく。これを粗末にしては申し訳ないよということです。それは、

「この肉体に留まってこの地上で神の栄光を現せ」

という命を私たちは受けているからなんです。

「地上に留まって、そこで神の証人として御名の栄光を現せ」

と。ヨハネ伝17章の所にありますね。

「私は御許に参ります。彼らはこの世に残ります。だから、彼らをこの世にあって護ってやってください」

と、そう祈ってくださっています。

健全なる福音

この世にあります宗教の非常に危ない点、過ちは、ある宗教はもう「天だ、天だ」と言って、この地上のことを全く無視してしまう。その無視の仕方が、肉体を粗末にして早死にす

るという形の無視なら、まだ迷惑は世にかからないけれども、「この地なんていうのは禄でもないものだ。地におる者なんか大したことない。殺せ、殺せ」といって殺してしまう。「オウム真理教」というのがそうでしょ。

「殺すことによって彼らは救われる。殺すことは彼らを救ってやることだ」

「そうですか、そうします！」

と、サリンを撒いたわけです。天の次元と地の次元を、ああいうふうに受けとって、「この地の奴は殺してやらなければ救われないんだよ」と言ったら大変なことになります。でもその種のものがまだまだ他にも出てくると思います。

だから、本当に天の秩序と地の秩序がちゃんと神さまの聖旨の中で繋がっているということをしっかり受けとって、この地上は肉の人の訓練の場だと。一足飛びに天の人に我々は成れない。この地上で生を受け、ここでトレーニングを受けて、備えが終った時に向こうの世界へ導かれる。その順序を間違えてはいけない。その意味で「健全なる福音」ということです。

パウロの書簡を見ましても、

「結婚するなと言ってみたり、食物を取ってはいけないと言ってみたり、情欲、結婚は、いわゆる性的なものは全部断ち切れとか、いろんなことを言って、いかにもそれが崇高なことであるように言っている者があるけれども、我々の情欲を断ち切るというのは、何の役にも立たない。そういうものに惑わされるな」

とパウロはコロサイ書で言ってます。ですから、小池先生はよく、

「パウロ書簡はしっかり読みなさいよ」

ということを言っておられました。パウロ書簡は我々の現実のこの世の生活を健全に営むために、非常に必要な智慧を与えてくれている。方向を示してくれている。「でも、パウロ書簡においては、結婚に対してあまり積極的ではないですよ」と言う人がおるかも知れない。

「乙女よ、結婚するな」

とか（笑）。それは、パウロは「もう明日にも御国が来る」と思っているからね。明日でなくても、本当に近いうちに来ると。

「乙女たちよ、あなたが結婚して、旦那に苦しめられ、縛られて仕えて、そっちへばかり気が向いて、主さまのことを思えなくなる。そんな不幸な目に私は合わせたくない。だから、ひたすら主さまを待っていなさい。その方が得だよ」

ということです。決して「結婚というものはよろしくない」とか言っているのではない。あのコリント書簡を書いた時には、そのように本当に彼は思って、ああいうふうに書いた。一般的に言いましたならば、決してそんなことは言ってない。むしろ、

「この世の結婚というものは、天国のキリストと花嫁である我々の、その結びを表すようなものである」

という言い方をしてます。「夫は頭で妻は体」というふうな言い方をしまして、

「頭はキリスト、体は教会。そのように夫は体である妻のために生命を投げ出せ。キリストがエクレシヤのために生命を棄てられたように、体である妻を愛する愛というのは命懸けでなくてはいかん。俺は頭だと言って威張りくさっているのは、全然そんなものは御意ではない」

ということをエペソ書簡で言っているわけです。

パウロ書簡の受けとり方も、平面的、機械的、部分的にそこだけ受けとって、それに惑わされてはいけないという意味で、やはりきちんと正しく指導してくれる人というのが必ずどの集まりにも要ります。指導者が変な方向へ導いて行ったら、みんなが谷底へ落ちますから。正しい指導者のもとで正しい指導を受けて、健全に歩んで行くということが必要です。

私はキリストに導かれてよかったと思います。そしてまた時至って、小池先生に出会うことができたのは本当によかったと思っています。今度は、皆さま方が小池先生に出会い、そしてまた私に出会ってよかったと思ってくだされば、本当にうれしい。人数が小人数であろうと、自分たちが本当の大道を、健全なる道を示された。今度はそれをまた次の世代に伝えて行かねばならないという、それを本当に思っていただきたい。それを成就してくださるのが聖霊なんです。すべては聖霊から始まる。

使徒行伝はこの程度にいたしまして、福音書へ帰りたいと思いますが、どうぞ、使徒行伝はご自分の目でずっとお読みになってください。このペテロとヨハネを通して、どんなに素

晴らしいことがそこに成就しているか。当時の初代の、この時の信者たちがどんなに燃えていたか。そういうことがこの使徒行伝の3章、4章、5章あたりをお読みになったらわかります。それから、それがまた異邦人の方に伝えられて行くという異邦人伝道の姿。ステパノが出てきます。パウロが出てきます。それから、コルネリオなんかが出てきます。ずっと異邦人に広がっていくわけです。そのあたりの所も、どうぞご自分で読んでいただくことにしまして、福音書へ行きます。

神がキリストにビジョンを示される

福音書ではヨハネ伝に参りたいんですが、ヨハネ伝の結論的な所は14章ですね。14章9節から読みます。

「9**イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。10我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等にいう言は、己によりて語るにあらず、父われに在して御業をおこない給うなり。』**」（ヨハネ14・9～10）

このことは5章にも同じようなことが出てますので、ちょっと5章を見てください。38年間、病に苦しんでいた方を安息日に癒された。その時の問答です。「安息日にこういうこと

をやった」というので当時の宗教家に、ユダヤ人に責められたわけです。

「17**イエス答え給う『わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり』**

と。この38年間、病に苦しんでいた人が癒されたのは、「父が働かれたからだ。私ではない」と言っておられる。

「8**イエス言い給う『起きよ、床を取りあげて歩め』9この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。**」

と9節にありました。

「それは父の御業であって、私ではない。たとえ私であるとしても、それは私を通して父が働いておられる」

ということをキリストは答えられた。それでいよいよユダヤ人たちは怒りだした。

「18**此に由りてユダヤ人いよいよイエスを殺さんと思う。それは安息日を破るのみならず、神を我が父と言いて、己を神と等しき者になし給いし故なり。**

神さまがイエスの中に百％宿ってしまったのだから、仕方がない。

しかし、自分が神に成り代わって、「俺は神である。さぁ、みんな俺を拝め！」と言って、人間がひとりでに神に成ったと思ったら、それは傲慢という。サタンがこれなんです。イエスはゼロです。平伏していたイエスの中に神さまがおりてきて宿られて、

「さぁ、私の業をお前はするんだ。私の言葉を語るんだ」

と、神さまが迫ってきて、イエスを通していろんなことをなさっている。イエスの責任ではありませんから。それは拒めないですよ、イエスさまは。それをここで言っている。

19イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは、自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。20父は子を愛して、その為す所をことごとく子に示したもう。また更に大なる業を示し給わん、

「ここの所はどういうことかな？」と、ずっとかねがね私は考えていた。今思っていることは、イエスさまには、神さまはビジョン（異象）を示されるのではないかと思う。たとえば、そこに寝ている人がある。その人が手を按かれてスッと起き上がって跳び跳ねるような、そういうビジョンを示されるのではないかと。それは父の御業で、神さまがそういうことをなさっている姿を、キリストにビジョンを示される。キリストは同じようになさる。そしてその通りに成っていく。御言だって、先に神さまが語るべき御言をお示しになる。その通りのことをキリストは仰る。

「わが語りし言は父の御言なり」

という。そういうふうに、ことごとくキリストの中に、先にいろんなことをお示しになって、キリストはその通りなぞらえてなさっている。ちょうど、お習字のときにありますね、点々点々となっている所をなぞらえて書くように。何か先に御業、御言をお示しになる。

ラザロの復活の時もそうだった思う。遠くにいらっしゃるイエスさまにラザロの甦りのビジョンを与えられて、

「さぁ、お前は今からあそこへ行って、これをやるんだよ」

と。それで、キリストは行かれて、そして祈られて、

「あなたは全てをお示しになりました。また、私が祈ることをことごとく聴いてくださいました。この世の人たちにわからせるために、今、御業をなさってください。既にお示しになった御業をここでなさってください」

と言って祈られたと思うんです。つまり我意で、勝手気ままに、気まぐれで何かなさるようなお方では絶対にないと思います。

そのくらい父なる神さまとイエスさまとの結びつき、その密着度は強かった。本当に父は御子の中に百％内住しておられ、御子は父の懐に百％抱かれてあるという、その関係がずうっと続いていた。それが分離されたのがあのゲッセマネの祈りでしょ。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし。どうして、こんなことに？」

と。ゲッセマネの祈りの時は、なるほどイエスは、それはビジョンとして示されて、

「これしかないんでしたら、お受けいたします」

と言われたけれども、まだ現実ではないですよね。それが本当に現実になったのがこの十字架の死でしょ。それで思わず、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

というお言葉が突いて出たと私は受けとったんですね。小池先生は、

「これは義の叫びだ。こんな義人が棄てられてたまるものですかという、プロテストとしての叫びだ」

というふうに言われるけれども。とにかく、地上にいらっしゃったイエスさまという方は本当に父と一つ、分離しがたく一つ。しかも自分の自覚では、

「自分は空っぽだ。私ではない、善き方は父のみだ」

と仰るくらいに空っぽなお方で、そして、父に栄光を帰しておられる。だから、この御業はここにありますように、

19……子は父のなし給うことを見て行うほかは、自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。20父は子を愛して、その為す所をことごとく子に示したもう。

と。子供さんだって、何か小さい子供というのは親のする通りのことをするみたいね。本当にそっくりなことをするという、そういうことを聞きますが。

また更に大なる業を示し給わん、汝等をして怪しましめん為なり。21父の死にし者を起して活し給うごとく、子もまた己が欲する者を活すなり。22父は誰をも審き給わず、審判をさえみな子に委ね給えり。23これ凡ての人の父を敬うごとくに子を敬わん為なり。子を敬わぬ者は、之を遣し給いし父をも敬わぬなり。24誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信ずる人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。25誠にまことに汝らに告ぐ、死にし人、神の子の声をきく時きたらん、今すでに来れり、而して聞く人は活くべし。26これ父みずから生命を有ち給うごとく、子にも自ら生命を有つことを得させ、27また人の子たるに因りて、審判する権を与え給いしなり。28汝ら之を怪しむな、墓にある者みな神の子の声をききて出づる時きたらん。29善をなしし者は生命に甦えり、悪を行いし者は審判に甦えるべし。30我みずから何事もなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審判は正し、それは我が意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る。」（ヨハネ5・8〜30）

キリストと同じ姿に変わる

それからもう少し前へさかのぼりまして、3章31節のところです。

「31上より来るものは凡ての物の上にあり、地より出づるものは地の者にして、その語ることも地の事なり。天より来るものは凡ての物の上にあり。32彼その見しところ聞きしところを証したもうに、誰もその証を受けず。33その証を受

くる者は、印して神を真なりとす。34神の遣し給いし者は神の言をかたる、
イエスさまのことですね。
神、御霊を賜いて量りなければなり。35父は御子を愛し、万物をその手に委ね給えり。
万物の運命は御子の手中にあると。だからもしも、キリスト・イエスさまが
「もう嫌になりました。この地には愛想が尽きました。もう嫌になりましたから、
私は御許に帰ります」
と言って、サーッと天へ帰ってしまわれたら、もう終りだったんです。でも、イエスさまはそれを仰らない。駄々をこねないで、最後まで全うされた。万物はイエスさまの御手の中にあったから、イエスさまが「もう嫌っ！」と言ったら終りだった。それをあの十字架の死に至るまで、マイナスは全部ひっかぶって、そして万物には生命を与えた。
こんなことをなされる方はイエス・キリストの他に私は知らない。他にそういう方がいらっしゃれば、そちらへ行って、その方を信仰なさったらいいんだけれども、私にとってはこのイエス・キリスト、そのお方を正面に見て、そのお方の中に埋没していくしか私の生命はない。そのお方の中に埋没するのであって、お墓の中に、この地の中に埋没するのではありません。キリストなる光の中に自分を入れる。そしたら、光に貫かれる。
「わが言は霊なり生命なり」

という。
36御子を信ずる者は永遠の生命をもち、御子に従わぬ者は生命を見ず、反って神の怒その上に止まるなり。」（ヨハネ3・31～36）
「御子を信ずる」というのは、そういうふうに御子を受けとって、御子と一つに合体させていただく。これは聖霊がそうさせてくださる。「聖霊を受けとる者は」というふうに読み替えていただいていい。聖霊をいただく。聖霊において御子と一つになれるんですから、聖霊は御子キリストの分身、分霊です。天界の霊なるキリストがご自分の霊を助主、聖霊として我々の一人ひとりに与えてくださっている。それが聖霊という姿の御子キリストです。
だから、それを受けとる者はもう「永遠の生命」にならざるを得ません。また、その人は愛の人にならざるを得ません。御子の霊は愛の霊ですから。その御子の霊が神さまの御思いにかなうような生活へと我々を導いてくださる。その導きに従っていますと、いつのまにかモーセの十誡も全部成就されている。「すべし、すべからず」は全部、聖霊がちゃんと成就していてくださる。そうなんです。「戒めを守ったら聖霊がくる」のではなくて、
「聖霊を受けた人は戒めを守らざるを得ない」
ということ。キリストの霊を受けた人はキリストの言葉を大事にします。キリストにあるお方を愛します。それを何よりも尊いと思います。よく、女の方は言いますね、
「あんたは私の子だよ、お母ちゃんがお腹を痛めて産んだ子だ。だから、あんたは

そんなことは絶対にしないよ」

と。なにか「お腹を痛めた」ということでね、すっごいことを――我々父親から見たらうらやましいようなことを――お母さんというのは言うんです（笑）。強いなぁと思うんです。へその緒で結ばれて、何か「本当に分身だよ」という言い方をしています。

だから、キリストさまはそのように、

「あなたは、私がお腹を痛めて産んだ子供だよ」

と言ってくださる。本当に十字架でご自身の御体を痛めて、審判を受けて、

「あなたを清め、新しく産み出した。霊によって産み出した。お腹を痛めたんだよ」

とキリストに言っていただいたら、我々は本当に心強いでしょ。つまり、キリストが、

「私が責任を持つ。私の創造の業は終らないよ、あなたが本当に私と同じ姿に変わるまでは」

と仰ってくださる。

「栄光の御姿に形作ってくださる」

という、あのピリピ書の約束の言葉が成就するまでは、今に至るまで働き給う。これからも働き給う。御業は終らない。疲れ給うことはない。無限無量なんですよ、神さまの世界というものは。だから、

「走れどもつかれず歩めども倦まざるべし」（イザヤ40・31）

というのは、御自身のことかもわかりませんね。キリストの御働きというものは止まるところがない。永遠に御業を続け給う。

「昨日も今日も変り給うことなし。今日も明日も次の日も進み行くなり」（ルカ13・33）

と。そういう御業を我々の中でなしとげて、そして我々一人ひとりを小さきキリストとして用い給う。そして、この闇の世を光に化そうとして、その働きを続け給う。

そういうものに我々は変えられた。これが我々の人生の喜びであり、人生を生きる意義です。単に私が天国人として天国へ行かしてもらうということだけではない。先ずその前に働きをしないといけない。向こうへ行けば、もっともっと働きをするでしょう、きっと。

けれどもやはり、地上の人たちに語り得るのは我々なんですよ。イエスさまはなぜ肉の姿をとって来られたかというと、我々と言葉が通じるためです。いきなり天の次元の霊なる神さまが、エホバの神さまがウワーッと語っても、それは雷が鳴っているのと一緒です。言葉として聞こえない、わからないです。

わずかに選ばれたモーセなんかが神の声を聴こうとしたら、恐ろしい光景だったというわけでしょ、シナイ山の上で。しかも、旧約では「神を見た者は死ぬ」と言われていた。

「聖なる神さまに肉なる人間は、出会ったら焼き尽くされて死んでしまう。だから、みだりに神の名を称えるな」

という。だから、「主さま」「アドナイ」と言っていたのが、「エホバ」に変わって行ったということです。そのぐらいのお方ですから、霊なるあの「ヤハウェー」という名前で呼ばれている神さまは、どんなに愛の方で、

「我は有りて在るもの、有りて在らしめるものである」

といくら仰っても、直接的には繋がらなかった。それをイエスさまというあの姿で我々の所に降りてきて、問答して、弟子たちと一緒に暮らして、貧しい者たちの所へ行って、病める者を癒して、人としてあんなに素晴らしい姿で我々と関わりを持ってくださった。そしてその最後は十字架だった。そういうふうにして、我々と縁を結んでくださった。

「今度は、あなたたちが――まだ目覚めていない多くの人たちがいる――その人たちをも救わねばならない。その人たちをも神の子に変えなければならない。それをやってくれるのがあなたたち一人ひとりだよ」

というのがペンテコステですね。

「聖霊を受けてくれ。聖霊を受けよ！」

というわけです。

御業を行うこと、これ食物なり

今度は4章に行きましょう。ヨハネ伝はあちらこちらを見ます。

「13**イエス答えて言い給う『すべて此の水をのむ者は、また渇かん。14されど我があたうる水を飲む者は、永遠に渇くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし』**

聖霊をいただいたからといって、喉が渇かないなんてありえません。肉体の渇きというのは、このヤコブの井戸の水でいやしてもらうしかないわけです。けれども、

「内的な渇き、魂、霊の渇きをいやすのは、ヤコブの井戸ではダメだ。これは私が与える水だ。これは聖霊だ。この聖霊というものをいただいたら、あなた方の中の霊なる渇きは止まってしまう。いや、のみならず、内側から湧き出てきて、それを他の人々に流して行くことになるから、あなた独りの問題ではない。あなたの中から湧き出る、それが大事だよ」

と。それから、礼拝のことがそのあとで出てきます。

「この山でもあの山でもない。どこでもいい、いずこにても。家庭の中でも、この集会所でも、どこででも神を礼拝できる。真の礼拝は霊と真をもってする礼拝。真心こめて、「主さま！」と祈るその祈りが礼拝だ。礼拝とは、私を受けとるのが礼拝だ。私を受けとりなさい。そして、私から使命をいただきなさい。新しく力をいただきなさい。そして働きなさい。その原動力をいただくのが礼拝だよ」

と。大体、私たちは神さまに何かをお返しするなんていうことはできない。そうでしょ。神さまにお水を差し上げたって、飲んでいただけないですものね、霊なる神さまに水を差し上げても、飲んでいただけない。私たちは一方的に、むしろ霊なるキリストさまから霊なる生命をいただき、霊をいただき、力をいただき、そして御言をいただき、使命を授かって、そしてそれを実行していくという、それを日毎にやっていく。これが礼拝だよと。

日曜日は確かに日曜日として我々兄弟姉妹が召団として、集会として使命をいただき、召団としての御業を現すために一所に集います。これはとても大事なことです。と同時に、日々の我々のウィークデイ、それも一人ひとりがそのようにして主さまから生命をいただいて新しく歩んで行く。ちょうど毎日御飯を食べるように、毎日、御言・御霊をいただく。

ただ、これは霊の糧でありまして、霊の交わりですから、時間の長短ではない。1時間やったから充分かというと、そうもいかない。瞬間でもいいんです。場所もどこだっていい。新幹線の中でもいいし、電車の中でもいい。とにかく、目をつむればもうそこは密室です。我々はこの世に体を置いていながら、霊はいつもこの世ならざるところにつながって、そこに帰って行けるわけですから、これはありがたいことですよ。

これは二重です。私たちは、ある面では、このヨハネ伝で言いますと、天と地、上と下。神さまのご臨在し給う神の国、天の次元と、それに対して世それから肉の、二重です。

こういう言葉が出てきている。特にヨハネ伝3章では、

「上より来るものは、すべてのものの上にあり」

と。「上・下」とか、「天から来るもの・地に属するもの」とか。終りの方では、この「世」というのがたくさん出てくる。

「24**神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり**」（ヨハネ4・24）

というのがありました。それから、もう少し先へ行きますと、食物のことが出てきます。弟子たちは食物を買ってきた。ところが、イエスは何と仰ったか。

「34**イエス言い給う『われを遣し給える者の御意を行い、その御業をなし遂ぐるは、是わが食物なり』**」（ヨハネ4・34）

ここまでいったら凄いですね、霊なる食物だと。肉体の食物はもちろん別ですけれども、霊なる食物は、先ずは私たちはいただくことから始めます。いただくことから始まって、御業を行うことがまた霊の食物になっていく。御業を行うことによって、いよいよその霊が鍛えられ、成長していく。成長のための糧は何かというと、働くことだという。

「御業を行うこと、これ食物なり」

と。だから、始めの食物は、出発点はいただくことです。先ずいただくだけいただいて、それで満たされたら、今度は働く。働くことがまた次の食物となって、いよいよその人は成長していくという。ですから、祈ることも働くことも一つなんですね。この働くことも

「34**……御意を行い、その御業をなし遂ぐるは、是わが食物なり**」

とあります。御意は一人ひとりにおいてみな具体的な業は違うはずです。一人ひとりにおいて御意が成っていく。御言に専従する人は、それがその人の「御意を行う」というわけですし、どれが上でどれが下ではない。大事なのは、御意を行っているか、我意を立ててないかにある。「いや、私にはあっちの方が派手に見えていいんです。あっちに変えてください」なんて、そんなことを言ってはダメです。スミレはスミレ、バラはバラ、みなそれぞれが花咲かないと。「私はあのようになりたいんです」と、すぐ人をうらやんだりしたら、これはよろしくないですね。

「私はあなたにこれを望む」

「はいっ」

と言えばいいんですよ。我々が悩むのは、

「これは本当に御意なんだろうか。こういうことを今やっているのは、御意なんだろうか？」

と言って、それでわからなくて悩むということがよくあります。私は申し上げたい。今、置かれている場、それは先ず御意だと思って受けとってください。それを変える時には、変えるだけの迫りがあるはずです。「嫌になったから変わります」、これが一番いけない。「だんだん空しくなってきたから変わります」というのはいけない。今置かれている場で精一杯やる。祈りをもって精一杯やる。そして次の所に変わるべき時には、主さまの方できちんとサ

インを送り、そのように導いてくださいます。きっとそうです。ですから、疑わず、つぶやかず、ためらわず、今置かれている所で祈り、そして喜んで感謝して御業を行っていく。

「御業をなさしめ給え」

と祈っていく。私はそれが一番いいアドバイスだと思っております。

汝を世に遣わす

さっき、「世」ということを言いました。「世」ということを少しこのヨハネの福音書から見ていきますと、17章の所にキリストの最後のお祈りが出てきます。4節から、

「4**我に成さしめんとて汝の賜いし業を成し遂げて、我は地上に汝の栄光をあらわせり。**5**父よ、まだ世のあらぬ前に、わが汝と偕にもちたりし栄光をもて、今御前にて我に栄光あらしめ給え。**

この世から選び出す。この世は神さまがお造りになったけれども、これは最後のものではない。この世から脱出しなければならない。

「なんじら世をも世にある物をも愛すな。人もし世を愛せば、御父を愛する愛その裏になし。」（ヨハネ一2・15）

と、ヨハネの手紙にありますけれども、この「世」というものは神さまがお創りになったにもかかわず、神さまは

「この世に留まってはならない、世から脱出せよ」

と言われる。この世は肉につながりますよ。そういう次元ですので、これは最終のものではない。そこからもうひとつ上に変貌を遂げなければ、霊化されなければいけません。

「人新たに生まれずば。肉から生まれる者は肉なり、霊から生まれる者は霊なり」

という。そこで脱出を遂げなければいけません。その脱出を先ず弟子たちにおいて主はなさろうとした。

6世の中より我に賜いし人々に、われ御名をあらわせり。……9我かれらの為に願う、わが願うは世のためにあらず、汝の我に賜いたる者のためなり、彼らは即ち汝のものなり。10我がものは皆なんじの有、なんじの有は我がものなり、我かれらより栄光を受けたり。11今より我は世に居らず、彼らは世に居り、我は汝にゆく。聖なる父よ、我に賜いたる汝の御名の中に彼らを守りたまえ。……14我は御言を彼らに与えたり、而して世は彼らを憎めり、我の世のものならぬごとく、彼らも世のものならぬに因りてなり。15わが願うは、彼らを世より取り給わんことならず、悪より免れさせ給わんことなり。16我の世のものならぬ如く、彼らも世のものならず。17真理にて彼らを潔め別ちたまえ、汝の御言は真理なり。18汝われを世に遣し給いし如く、我も彼らを世に遣せり。

「世のものでないように」と言って、脱出せしめながら、しかも「世に遣わす」と仰っている。それはなぜか。世を救わんためなんです。23節をみますと、

23即ち我かれらに居り、汝われに在し、彼ら一つとなりて全くせられん為なり、是なんじの我を遣し給いしことと、我を愛し給うごとく彼らをも愛し給うことを、世の知らん為なり。

世が知り、そして世から脱出して、この父の子供になってほしいと。

24父よ、望むらくは、我に賜いたる人々の我が居るところに我と偕におり、世の創の前より我を愛し給いしによりて、汝の我に賜いたる我が栄光を見んことを。25正しき父よ、げに世は汝を知らず、されど我は汝を知り、この者どもも汝の我を遣し給いしことを知れり。26われ御名を彼らに知らしめたり、復これを知らしめん。これ我を愛し給いたる愛の、彼らに在りて、我も彼らに居らん為なり』」（ヨハネ17・4～26）

と。世というものと、神さまの御国というものが非常に対立的な関係にあって、私たちは世に属している。しかし、世から脱出させられるけれども、もう世から取り去って、御国へ連れて行くとは言っておられない。15節にありますように、

「15わが願うは、彼らを世より取り給わんことならず、悪より免れさせ給わんことなり。」（ヨハネ17・15）

と。そして、むしろ「世に遣わす」と仰った。どういうことかといいますと、イエスさまはこれほどに、世というものと神さまとが、ある意味では敵対関係というか、世は神さまを知らない。世は滅びに向かう。世の中に閉じこもっていれば、生命はない。

聖霊を受ければ聖霊の分身

ここまで仰っていながら――先程の3章に戻ってください――こういう世でありながら、

「16**それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり、**

と、こう来るんですね。だから、この3章などは、後から振り返って戻ってきて読んだ時に物凄くビンビンくる。始めに前から読んでいる時には、

「ああそうですか、ああそうですか。そのように世を愛してくださったんですか」

で終るんだけれども、この世というものがいかに神さまに敵対し、光なく闇であるか。そこに居ったのでは死ぬしかないんだということが、繰り返し終りの方で強調されている。それを前に戻ってきますと、こんな世というものを独子を賜うほどに愛してくださっている。それはなぜかというと、この御子によって一人も滅びないように御子を与えようとされた。御子を与えるということは、聖霊を与えるということです。

「御子を与えることの究極は聖霊を一人ひとりの中に与える。その聖霊がこの世を脱出せしめて、本当に天国人としてくださる。どうしても聖霊を受けてほしい」

という、そこへ戻っていくわけです。

すべて彼を信ずる者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。17神その子を世に遣したまえるは、世を審かん為にあらず、彼によりて世の救われん為なり。18彼を信ずる者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の独子の名を信ぜざりしが故なり。19その審判は是なり。光、世にきたりしに、人その行為の悪しきによりて、光よりも暗黒を愛したり。」（ヨハネ3・16～19）

「我々は世にありながら、しかも世の者ならず」

という矛盾した在り方をさせられているということです。

だから、いろいろ皆さんに嘆きがありましても、それは当たり前だと思っていただきたい。神さまがこういう問題だらけの世に我々をのこしておられるという、そこに神さまの深い御意があるということです。だから、「天国が慕わしければ、さっさと首をくくって向こうへ行ったらいいか」と、そんな勝手なことはゆるされない。地上であなた方は使命がある。世にあって、しかも悪から免れるように、神さまの遣わし給うたイエスさまがあれだけの御業をなさった。今度は、あなた方がその先を行くんだと。聖霊をいただいて、イエスさまの先兵として、一人ひとりが蜘蛛の子を散らすように散っていく。そうやって、一人ひとりが神・キリストの分身のような姿で、あのペテロやヨハネやパウロのように御業を現していく。派手でなくていいですよ。でも、「本当にあの人は神の人だ」と、接する人が感ずるような、

そういう聖霊の人であれと。

「病める者に手を按(お)けば癒(いや)される」

と、約束を主はしてくださった。だから、病める者の肩に手を按いて、

「本当に主さま、あなたのお約束はこうですから、この人を本当に内的に今、癒してください。病気が現象的に癒(い)える癒えないではありません。本当にこの人の内側から、この人を本当に永遠の生命に、生ける人にしてください。それを止めるような病をぶっこわしてください」

といって祈るというふうに。そして、本当に我々一人ひとりが、このキリストの分身になっている。聖霊を受ければ聖霊の分身なんです。そして、イエスさまが地上であられた時に絶えず天を慕っておられたように、我々は主イエス・キリストを慕わざるを得ないんです。その主イエス・キリストはもはや血を流して今も呻いておられるイエスさまではない。

「私は生きている。私は甦った。生きている。もうあんな所に私はいないよ」

と。傷痕がありながら、しかしそれはもう光り輝いて、すべて終ったと言う。

「喜びがあるよ。平安を与える。私はこの世ならざる平安をあなた方に与えるから。私と一緒に生きておれば、絶対に仆(たお)れることはない」

というお約束がイエス・キリストを通して聖霊によって、すべて現実化していく。

ご自分において現実化されないものはまだ「絵に描いた餅」ですよ。「絵に描いた餅」を

眺めるために集会しているのではない。皆さんの中に本当に聖霊が宿り給うためです。もう宿り賜っているという、その現実をいよいよ確かめながら、心を一つにして祈る。

私はペンテコステ特別集会というのは、そのようにして祈り込む集会だと思う。聖書の御言をいわば足掛かりとして、土台として、本当に主さまに祈り込む。心を一つにして祈り込む。弟子たちは十日間祈っていましたけれども、私たちはそんなに時間は持てませんけれども、質的にはそのような祈りをもって祈り込む。

「イエス・キリストの名の中へとバプテスマされよ」

と。「主さま、あなたという御本尊、栄光の主さま、あなたの中にバプテスマされます」と言って自分を――小池先生は「投げ入れていく」と言われた――私は「浸(ひた)す」というか、温泉につかるように、

「あなたの中につからせてください」

と言って祈り入るという、そういう集会です。そこから先のことは主さまがなさってくださいます。お約束はもう、「二度とあなたを離れない」というのが約束なんです。

「この聖霊なる方は永遠に汝と共におらしめ給うべし」

という。

ヨハネ伝をベースにして読む

最後にヨハネ伝14章へ戻ります。12節から、

「12**誠にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。**

私を受けとる者は私のなす業をなす。いやそれよりも大いなる業をなす。私は父の御許に行く。そしてそこから聖霊を遣わすからと。

13**汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。**14**何事にても我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。**

もう私はあなたと一つになって働くからね。そして私は父にお願いした。助け主を与えてくださる。そのお方は永遠にあなた方と一緒にいてくださるお方だ。これは真理の御霊だ。聖霊だ。この方を私はもうお願いした。そしてそれは来た。ペンテコステで弟子たちに臨んだ。そして今は、あなた方にはもう随所に随時にいつでも臨む。私の名を呼べばもう来ている。「主さま」と呼べば、私は来ている。妨げは何もない。その方は永遠にいてくださると。

17**これは真理の御霊なり、……彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。**

真理の御霊は、あなた方と一緒にいてくださり、あなた方の中にいてくださる、そういうお

方なんだと。これはもう全部成就していますから、福音書で書いているのは、「これから」ということで書いているけれども、我々が読む時には

「あっ、成就しました。ありがとうございます。全部今、成就したことを感謝いたします。本当にそうですね。あなたが一緒にいてくださり、うちにいてくださり、そして『孤児にはしない。お前の中に来るからね』と、本当に来てくださいました。ありがとうございます。全部成就しました」

と。そして、

19**……われ活くれば汝らも活くべければなり。**

「私が生きるのであなた方も生きるんだ」と言ってくださっている。そして、

20**その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。**

「私は父におり、あなた方は私の中におり、そして私はあなた方の中にいるということがはっきりとわかるよ、体で感じとられるよ」

と、そんなお気持ちです。そして、26節、

26**助主すなわちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、又すべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし。**

「助け主すなわちわが名によりて父の遣わしたもうた聖霊はあなた方にすべてのこ

とを教えてくださっただろ。これからも教えてくださるよ」

と。だから、この聖霊が福音書を我々にわからせてくださる。聖霊に導かれて福音書を読むということ。聖霊の中で福音書を読みますと、日毎に放つ光が変わってきて当たり前なんです。その日その日、違う光が発せられて当たり前なんです。

「昨日はこの御言が物凄くきた、今日はこの御言だったよ」

と、そういうふうに、この福音書の中のキリストの言、御業、それは全部、祈りの中で開いていきます時に、日によって全部違う働きをしてくださって当たり前のことです。大事なのはイエス・キリストご自身があなた方お一人お一人の中で御業をなさってくださるということです。それのいわば手助けに御言をちょこちょこくださる。

「あなたが今、思っていることは、福音書でいえばここに当たる。福音書でこう書いてあるだろ。それが今、あなたにおいて成就しているんだよ」

という、福音書は証拠物件なんですよ、実は。証人なんです。福音書が私たちを証(あかし)してくださる。そしてまた、私たちは

「福音書に書いてあることは本当でした」

と言って、証人になるわけです。だから、神さまの側からは、福音書を通して私たちに証をしてくださるし、私たちは私たちの言葉、行動、生活ぶりを通して福音書を証していく。

「なるほどイエスさまはこんな素晴らしいお方であるか」

と。そういう形でこれはグルグル回っていく。これが聖霊をお受けになれば、

「あなた方は世の終りまで、地の極(はて)までわが証人となるんだよ」

と仰ったそのお言葉です。そして

「平安を与える。世が与えるようなものではない。揺るがぬ平安を与える。だから、その中にずっと留まっているんだよ」

と。まぁキリストのお言葉というのは懇切丁寧で、涙が出るほどありがたい。私は本当にそう思います。

私はやっぱりヨハネ伝をベースにして読むんです。それから他のマタイ伝とかその他の福音書を読むと、またそれが迫ってきますしね。それぞれに読み方があると思います。私はやっぱりヨハネ伝です。ヨハネ伝をベースにして、そして使徒行伝であろうと、ローマ書であろうと、その他のルカ、マルコ、マタイ、みな生き生きと甦ってくださるような気がいたします。そして、何よりも主さまを、「われ主を目の前に見たり」という、そういう思いです。姿は見えません。姿は見えませんけれども、本当に自分に迫って、語ってくださるようなお方。そして、向こうの世界へ往った時に、

「奥田くん、君はよくやったよ！」

と、こう言われたいですよね、本当に。

「お前は見てもおらんくせに、よく見てきたような顔して話をしていたね。それで

いいんだよ。自分は向こうでうれしかったよ！」

とか言ってくだされば、もう最高です。いや私は畏れ多くてもう、

「ははっ、いや勿体なく思います」

と、それしかないでしょうね、きっと。でも、そういうイエスさまの世界というのは実在界ですから、これこそが本当の世界であって、我々のは影のようなもの、しばしの地上なんです。この世は過ぎゆく。だから、

「世と世にある物にしがみついたってダメだよ。しかし、世にあってあなた方はわが証人であれよ」

と、この二つをきちっと受けとめて、一日一日を地道に歩んで行くということです。

はい、それでは終りといたします。

祈り

主さま、ありがとうございます。こうして主にある兄弟姉妹たちと二か月振りに再会することができまして、このペンテコステ集会をあなたによって導かれ、聖霊のご臨在の中に御霊・御言、一如にいただくことができました。どうぞ、あなたがあの使徒行伝において生き生きと働かれたように、今、私たちこの土の器を通して、あなたが生き生きと働いてくださいますように。そして、あなたは

「喜びを与える、平安を与える」

と仰ってくださいました。また、御霊は真理の御霊でいらっしゃいます。どうぞ、聖書の御言一つ一つを命づけ、私たちの魂の糧として、また導きの星として、私たちに与え導いてくださいますように、希いたてまつります。

また、聖霊は愛の霊でございます。本当にあなたが私どもを愛してくださったように、私たちは同じあなたの同じ愛の質をもって、兄弟姉妹を愛し、執り成し、荷い合っていくことができますように。

そしてまた、まだあなたのことを知らない多くの人たちが我々の周りにいます。どうぞ、その方々に対して忍耐強く地道に、そして聖霊の御力によって、御言を語り、生命をわかち与えていくことができますように。主さま、我らをお用いください。ここに集っていない兄弟姉妹たちにも、どうぞ等しき恵みを希いたてまつります。病を得ている方の中にも、どうぞ、あなたが慰めとなって臨んでください。

主イエス・キリストの尊き御名にあってこの願いと感謝と祈りを御前にお捧げいたします。アーメン。